

## 高濃度ビタミンC点滴療法が奏功した2症例



医療法人仁善会  
田中クリニック 理事長

### 田中 善 先生

鳥取大学 医学部医学科 卒業。  
医学博士(大阪大学)。  
大阪大学 第一内科(腎臓内科)、大阪厚生年金病院 腎臓内科  
医長を経て、  
医療法人仁善会田中クリニック 理事長に就任。  
日本内科学会認定内科医、日本腎臓学会腎臓専門医、日本透  
析医学会透析専門医、  
日本医師会認定産業医、健康スポーツ医。  
点滴療法研究会ボードメンバー  
(一財)腸内フローラ移植臨床研究会代表理事  
(一社)日本先制臨床医学会理事  
(一社)日本オーソモレキュラー医学会理事  
(一社)老化制御医学会理事  
(一社)日本臨床培養上清研究会理事

#### はじめに

今まで点滴療法研究会会報誌において、高濃度ビタミンC点滴療法を行い良好に経過した症例をいくつか掲載していただきましたが、さらに最近の経過良好の症例を提示いたします。  
点滴療法研究会会員の皆様の診療の一助になれば幸いです。

#### 症例1 T.N. 37歳 女性 診断:乳癌

2018年 左乳癌と診断(stage0)。乳房全摘術施行、術後ホルモン剤(ノルバデックス)服用。非浸潤性乳管癌、リンパ節転移なし、ホルモン感受性陽性、HER2(2+)。

2020年 CA15-3上昇。  
2月 CTC検査:5.6cells/7.5ml、CD133・CD44・OKT-4(幹細胞マーカー)陽性、c-MET陰性。

2020年 多発肺転移、骨転移(左腸骨)、局所皮下再発(摘出術施行)、stage IVと診断。ページニオ、フェソロデックス、ランマーク、リュープリン投与。

2020年 免疫療法(樹状細胞ワクチン、NKT細胞療法、活性化リンパ球療法)施行  
5~8月

2021年 免疫細胞療法、高濃度ビタミンC点滴療法(IVC25g)開始。  
5~12月  
9月 PETの集積増加。  
10月 10月からゼローダ、ランマーク投与。

2022年 当院受診:頑固な便秘、牛乳は大好き。  
1月 中学校教員。子ども3人。

2022年 高濃度ビタミンC点滴療法開始(IVC60g)  
2月~ 腸内フローラバランス検査施行。

2022年 腸内フローラ移植(糞便微生物移植)施行(6回)。移植後の腸内フローラバランス検査:獲得免疫系の増強、メンタルの安定という腸内フローラに変化。

2022年 CA15-3:20.4(←25.1)  
6月

2022年 便秘はましに。  
7月 8月CA15-3:16.8と低下。

2022年 元気になり、便秘はあるがガスがあまり  
11月 出なくなった。

2022年 調子が良いが、手足症候群がひどく  
12月 なっている（抗がん剤の副作用）。

2023年 職場復帰（公認心理士試験合格）  
3月

2023年 CA15-3:23.5、CEA：正常範囲  
5月

2023年 PET：肺転移、腸骨転移は不変。  
6月 ゼロータ継続。

現在 職場復帰し仕事、生活ともに順調に経過している。定期的にIVCを受けている。

#### 【評価】

肺転移、骨転移は完全に消失したわけではありませんが、進行もせず、**職場復帰が可能となり、QOLは非常に高く維持されています。**

#### 症例2 A.I. 72歳 男性

診断：悪性リンパ腫（濾胞性リンパ腫）

2020年 人間ドックのPET検査により、脊椎、  
9月 坐骨、肋骨、胸骨、頸部リンパ節、腹部リンパ節、脾臓に集積を認め、悪性リンパ腫（濾胞性リンパ腫）と診断。その後、無治療で経過観察。

2022年 左腋窩リンパ節腫大（5cm）のため切  
3月 除術施行。

2022年 IL-2R：1059  
4月

2023年 高濃度ビタミンC点滴療法開始  
2月 （IVC75g週2回で維持）。  
一時、右頸部リンパ節腫大傾向にあったが、4月から縮小傾向になった。

2023年 PET検査で増悪傾向にあったので、  
4月 6月から抗がん剤予定であった（IL-2R:777）。

2023年 IL-2R:599となり、抗がん剤は投与し  
6月 なかった。



2023年 IL-2R:727とやや上昇。  
7月

2023年 抗がん剤をせずに済んだため、スイス  
8月 に旅行に行き楽しんだ。

2023年 IL-2R:623と再び低下。  
9月 患者のQOLは全く低下せず、**2週に1回のIVC75g**で経過観察をしている。

#### 【評価】

抗がん剤を当初からできるだけ避け、免疫療法を希望して当院を受診されましたが、当院では悪性リンパ腫に対するIVCの効果が良好であることを経験していましたので、まずIVCから行いました。この症例も、**現在のところIVCで経過良好で抗がん剤もせずにQOLも良好に維持されています。**

#### まとめ

2021年、2022年の当院の年間初診がん患者数は2020年以前より倍増しています。相対的に比較的**低年齢層（50歳代以下）**が増加傾向にあります。また**進行した症例も多く急速な悪化傾向が**観られる症例も増加傾向にあります。この原因に関しては**早晩科学的検索により明らかになるものと**期待しています。

当院では**ほぼすべてのがん患者さんにIVCを**まずお勧めし、他の治療（抗癌剤などの標準治療を含めて）を併用する場合でも**IVCを基本治療として行うように**しています。副作用のない抗がん剤として、**正常細胞環境を整えるためにも、IVCは必須です。**胸水、腹水などの体液貯留傾向のある患者さん以外マイナス面は**ほぼありません。**積極的なIVCの活用をお勧めします。